

教師教育教材の開発について（座談会）

ビデオ教材開発の意図と経過

坂元（東京工業大学教授） この度、教師教育用のビデオ教材として、第一期分7本が完成して皆様のお手元に届けることが出来るようになりました。そこで今日は、そのねらいだとか、内容だとか、使い方だとか、あるいはビデオ教材を作成するまでの苦労話などを語りあいたいということで、主だった何人かの先生にお集まりいただいたわけです。

まず、いきさつから申し上げますと2年位前だったでしょうか、教師教育に関係する先生達がいろいろな形で教育実習の改善とか教職課程の教育の改善にかかわっておりました。例えば、東京大学の柴田先生の所では授業の記録を撮ったり、実習生の実習風景をビデオで記録したりして、これを分析しておりました。又、全国の私立大学の教職課程研究連絡協議会におきましても、ビデオ教材の必要性が強く感じられておりましたし、東京地区の教育実習連絡協議会の中でも、教育実習や教師教育の改善のために何かビデオ教材が必要だなあーっていう事が痛切に感じられていたわけです。

といいますのは、大学の教師教育では教育の原理だとか教育の心理だとか教科教育法だとかを教育するわけですが、そちらは、言葉とか写真とか図とかスライドとかで教えるわけです。しかし、学校現場での授業や教育実習生の授業が現実にはどのように行われているかを、大学の授業の中で教えるためには、ビデオ教材のような具体的な映像がどうしても必要である、そういう認識が大変高くなっていたわけです。

そこで、こうした先生方が集まりまして何とか共同して教育実習や教職課程の教育に役立つような具体的な映像を作ろうでないか、という機運が盛り上がってきました。一方では、国立の放送教育開発センターが大学の共同利用のセンターとしての役割をいろいろとさぐっておりました。現在の主な仕事は放送

大学の放送教材の作成に協力するということなのですが、広く大学全体の共同利用の機関としては教職課程の大学教育に関してもビデオ教材を作ろうじゃないかという内々の検討がされておりました。そこで、たまたま両方の情報がお互いに通じ合ひまして、この共同プロジェクトが成立したわけです。

つまり、放送教育開発センターの中に教師教育メディア開発研究会を主体とする教師教育教材の研究開発に関する企画委員会を発足させて、この事業に本格的に取り組むことになったわけです。こんな仕事ははじめてのことでありまして、出来るだけたくさんの大学の先生に参加していただきたいということで、教職課程の担当の先生方に三度ばかり意見のフィードバックをいただきながら、この作業を進めることに致しました。

最初は、全国の大学、短期大学の先生に対してビデオテープレコーダーを持っているかとか、今までにビデオテープを使って指導をしたことがあるかとか、こういう教師教育のビデオ教材ができたならお使いになりたいか、というようなことを全数調査したわけです。その結果、大体70%の大学でビデオテープレコーダーが教職教育課程に自由に使える状況にあるということ、65%の先生がビデオをすでに使った経験をお持ちであるということ、さらに、このビデオ教材がでたら是非使いたいとおっしゃる先生が80%もあるということが分ったわけです。しかも、使いたい教材の中味としては、教育実習の現場での様子、教育実習の意義、授業の設計の仕方、授業の方法、教育心理学的な内容のものといろいろあがってきたわけです。

そこで、そうした結果を整理しまして、最も要望の多かったものから順番に制作をする事に致しました。そこでまず、最も要望の強かった教育実習の事前指導に使う教育実習生の実習校における生活を扱ったビデオ教材を作ろうということになり、東京学芸大学附属の小学校、東京大学附属の中学、高校をわざわざ取材しました。

これを編集した教材を全国の教員養成大学の先生とか関東地区の教職課程の大学の先生方に見ていただきまして、その結果に基づいて一応の試作品を作成しました。さらに、この試作品を50校ばかりの先生に使っていただきました。

その結果をふまえて今回の完成品ができたというわけです。さらに、このビデオ教材に印刷教材をつけまして、ビデオ教材の中でどのような会話をかわされているか、先生と生徒のやりとりをもれなく収録したものをつけまして先生方の利用の便に供したわけであります。

全体の経過を大づかみに申しますと以上の通りです。そこでまず、一般大学を代表していただきまして、柴田先生に今日の教育実習の状況、この教材制作にいたる背景、さらにはこの教材に対するご期待をお話しいただきたいんですが……。

柴田（東京大学教授） 教育実習の事前指導に、VTR教材を利用すると言うことは、東京大学でも従来からやってきました。大きないわゆる一般大学での教育実習の事前指導と言うのは、学生側も何百人という大勢なので、この事前指導のやり方にいろいろ工夫がなされてきているわけですがけれども、なかなか十分なことが出来ないでいるのが、これまでの実態だと思うんですね。

東京大学の場合も、以前はいわゆる口頭での説明だけで終わってたんですが、それでは実習にでる前の学生に対して実習で何をするかということを十分理解させることは難しいだろうということで、東大附属での実習の場面を自分達でビデオを撮って、それで授業の在り方、進め方などをそのビデオ教材を通して説明するというやり方を試みていたんです。

しかし、これがいかんせん素人が作るビデオのために、なかなかうまく出来ない悩みがあったんですね。特に、音声を取ることが非常に難しい。中でも、教師側の発言は比較的取りやすいんだが、生徒の声というのは非常に取りにくいという問題があったわけです。それから、いろいろな場面をつなぐ編集上の技術もなかなか素人ではうまく出来ないということもあり、今から見ますと粗悪な教材でやっていたわけです。それでも使わないよりは、学生側にとって分りやすいということはあったんですね。

これは東大だけでなく他の多くの大学でもそのような試みが従来からなされ、同じ悩みを持っていたと思うんです。放送教育開発センターで専門家がきちんとしたものを作ってもらえるということになり、そのことを全国の大学の教育

課程の関係者の方に伝え、そのアンケート調査などをやったところ、その反響と言いますか、これは、私共の予想以上に大きかったように思うんです。是非そういうものができたら自分の所で使ってみたいという反響がかえってきました。さらにその作った試作品を東京地区の教職課程の先生方に見てもらい、いろいろと意見を聞くシンポジウムを企画したんですが、その際にもやはり予想以上の多数の大学から先生が集まって来ていただいて、御覧になっていろいろ意見をいただいたということがありました。

そういうことで、今回作ったものについて東京地区それから全国の教育学の関係の先生方に、2、3回、途中の段階で意見を聞いた上で最終的なものを作ってきたわけです。その際の注文とかいろんな意見を組み入れる方向で努力してきました。必ずしも100%組み入れることはできませんが、ある程度、意見を参考にして出来たと思いますし、このことで全国の先生方の教材に対する関心もかなり高まってきているということが言えるんじゃないかと思います。

坂元 教育養成大学の関係、さらには小学校関係のビデオ教材の制作につきましては、井上先生、児島先生が大変ご苦勞なされたわけですが、その経緯なり、背景なり、期待についてお話しいただきたいんですが……。

児島（東京学芸大学助教授） 柴田先生のお話しと事情はほとんど同じだと思います。教育実習は「理論と実践の橋渡しの場であり、両者の統合の場」とは言いましても、実際にはその両者の間には大きな隔たりがあります。そこに事前指導、事後指導の必要があります。この事前指導、事後指導をどう改善するかをめぐって、その教育内容・方法をめぐって、私どもも研究会を組織し、十年来取り組んできました。

プログラムの開発、マイクロ・ティーチング等の訓練方法の開発、教材の開発等を進めてきましたが、指導自体をリアルなものにするために、ビデオ教材の開発が最も大きな課題で、各大学で自作してきましたし、お互いに交換して利用したりもしてきました。しかし、泣き所は、素人作りのため、指導に耐えられるだけの「質のいいビデオ教材」が制作できなかったことです。

したがいまして、今回の企画を教育養成系大学の先生の集まりで披露しまし

たところ、大きな期待と後押しをいただいたわけです。「教育実習の日々」につきまして、企画段階で、こんな内容を盛りこんでほしいという要望をいただきました。また、試作品の評価につきましても、批判、要望を含めまして、活発なご意見をいただきました。これらのご意見の多くを盛りこむ努力をする中で、完成品にこぎつけたわけです。その点で、制作、編集にあられた鈴木さんには、注文ばかり多く、大変なご苦勞を強いることになり、申し訳なく思っています。

ロケの過程と苦勞話

坂元 今、お話しにありましたように、実際にこの収録だとか編集にあられたお二人のディレクターの方には、大変なお力添えをいただきました。そこでまず、鈴木さんに、ご苦勞話の一端をお聞かせいただけたらと思いますが。

鈴木（放送教育開発センター助教授） 小学校の場合は59年10月2日から10月20日にわたって9日間ロケをしたわけなんです。学芸大の附属大泉小学校というところでやりました。そこで、ロケの一番最初の日ですね、教育実習生に「実習をする最初のお気持ちはどうですか？」と多くの人に伺いましたら「これから3週間にわたって一体実習というのはどういう事をやるのか、子供達の具合はどうか、その学校の様子はどうかいろいろ分からないことが多くて、不安がつのってます」と、非常に心配そうな顔をして答えてくれたわけです。それで思ったのは、こういう学生達に、教育実習にくる前にビデオ教材を見て、教育実習というのは、だいたいどういうことをやって、どういう所に注意したら良いのかというようなことを前もって知らされていれば、こういう不安もかなり解消できるんじゃないかというふうに思い、この仕事は非常に大事なんだということを、痛感したわけです。

そのこともあって、どういうことに気をつけてロケをしたかといいますと、何週間かの実習期間をありのままに演出をまじえないで撮るということをまず注意しました。通常の番組ですと、そこにある程度演出というのは入らざるを

得ないし、入らないと面白く出来ないというような所があるわけなんですけれども、今回のこういう実習の教材というのは、そのままを学生に知ってもらうのが大事なんですから、なるべくそういう演出は廃してありのままを正直に構成するという中心をおいて、ロケをしたわけなんです。

坂元 中・高校の場合も、いろいろご苦労が多かったようですが、お聞かせいただけないでしょうか。

四方（前・放送教育開発センター助教授） 取材校がまず附属であったということで、そういう意味では、環境というか、学校側の施設及び対応される学校側の先生方、生徒も含めて慣れており、また教育実習にも慣れてるということで、大変仕事がやりやすかったと思います。

ただしかし、なにせ教育実習と言っても2週間ないし3週間あるわけですが、そのどこを取材するか、何を取材するかという問題が一番大きなことだったのです。当初は、教育実習の流れをとりたい、とって欲しいということだったのですが、それだけでははなはだ、抽象的なことだけしかわからなかったんですね。それを実際にビデオに収録するということになると何と何をおさえるか、どれをどの授業でとるかというような問題、どういう問題があるのかということが一番大きなことになってたんです。しかも、時間的な関係で、いきなり取材に入らざるをえなくなり、考えながら、走りながら、取材をするという点で、ちょっと苦労があったわけです。

また最初の予定では、30分位のものに編集することだったので、はっきり言いまして、まるまる1時間を取るということじゃなしに最後には編集して作品にするということでしたので、カメラ並びに音声の人達にある程度、自由に動いてもらいました。ところがその後、委員会の方針から、30分でなしに、実習生の授業を1時間まるまる欲しいとおっしゃったわけです。そんなわけで、実習生の授業には、音声担当のブームマンの人達が画面の中に入ってきたり、本来カットされるところがそのまま使われているところもありますが、こうした事情があったためと御了解願いたいと思います。

それから我々は、実習生が行う実習を記録していくということに徹しました。

ですから授業そのものの進行もどのように進むのか、また、誰が発言するのか、そういうことが全然分らないで、はっきり言いまして、言葉は悪いですが出たとこ勝負で取材していったわけです。それだけに大変迫力があって、例えば、実習生があがってしまったり、ミスをしたりすると、そのまま画面にのこることになり、大変、貴重な資料になったと思います。また、生徒さんも実習生さんも大変協力的だったので、そういう意味では、大変いい資料が出来たと思います。

教育実習も含めまして、学校での取材で一番困難なのは、スケジュールといえますか、時間割が度々変更されたり、スタジオとか外での録画に比べて条件が大変悪いということをつくづく感じました。

例えば、日程にしましても、急に授業が短縮になったり、変更になったり、会議が入ってきたりしまして、当初のこちらの計画も度々変更がおきるということで苦労しました。また、教室の取材では生徒数が多いので、教室の中に机がいっぱいあってカメラの三脚を立てる場所もないというような状態ですね。カメラが自由に動き回るといようなことは、ほぼできない。それだけ教室が狭いということですね。

それから、先程もちょっと触れましたけれども、ブームマンという音声を担当するのが、なにしろ40人から45人位という生徒の誰が発言するかわからない声を、おっかけなければいけない。音声担当の人達の一番大きな悩みでもありました。教室の中の照明にも苦労しました。たいていは南側に窓があるわけですから、そっちの方向からしか光がこないと、コントラストが強過ぎたり、大変映像的にとりにくいということ、等々いろいろな問題があります。

その他、カメラを意識しないということや、生徒がケガをしないようにコード類も整理しなくちゃいけないし、そういう意味においては、学校の取材というのは、大変難しくて、また、大きな機材をもって、ウロウロするということは、困難を感じる所ですね。

こうした意味では、学校の取材というのは、普通の場合よりも、大変やりにくい所であります。それから、子供の表情とか、先生とのふれあいというもの

を撮る場合でも、突然突発的にそれが行われるのでそういうものの記録というのは、大変難しかったですね。というよりも、ほとんど撮れないということです。そういうことで授業の記録、生徒の控室、授業の準備といった、どちらかと言うと表面的なものにどうしても、おわれてしまうことになります。ふれあいの場面というのは、今後考えていかなければいけないけれども、そのへん、難しい問題だと思います。

坂元 今お話になったように大学で先生方が教材として使うということで、できるだけ生のまま素材を提供していただくことに重きをおいたわけです。ですからディレクターの方には腕を十分に発揮できるような場が少なく、大変気の毒だったと思うんです。けれども、プロがお撮りになっただけあって、角度とか画面の構成とか音とかが大変素晴らしいと思います。どうしても我々素人が撮りますと画面がボケてしまったり、あるいは音がうまく入らないでガタガタガタと机や椅子の音、雑音だけが入っていて喋ってることが聞こえないとか、これが普通なんです。そういうことがなく本当にさすがにプロが作った映像だなあーっとありがたく思っております。しかし、絵を写したり音を入れたりするために授業そのものを変えるわけにはいかないので、若干その点映像とか音で苦しい点があるのは勿論言うまでもありませんけれども、自然の状態のままをできるだけ、又、はっきりと美しくきちんと撮っていただくことでいつも以上に大変苦勞をおかけ致しました。

制作者のみた「みどころ」

坂元 今回、こうしてでき上りました教材は、「教育実習の日々」について2本、それからビデオ授業記録シリーズにつきまして、実習生の授業が4本と先生がなさった授業の記録が1本ということです。けれども、かなり使い方や内容構成面で特徴が違っておりますので、それぞれの特徴について、お話しいたきたいと思うんですが。それから、作られた側からのセールスポイント等をお話しいただけますか。

鈴木 小学校で申しますと、3週間にわたって結局ロケした本数は、20分のビデオ67本ということで、だいたいこれは20時間分位にあたるんです。その20時間位のものを1週間かけて5時間分位に編集をし、その5時間分位を更につめていきまして、最終的にはだいたい45分から50分ものを4本制作をしました。

したがって、残った素材がたくさん出てきたわけなんですけど、残った素材の中からも使えると思われるのがまだあるわけです。たとえば、小学4年生を担当した教育実習生と指導の先生方との間で、マイクロティーチングをずっと学芸大の附属でやっておりまして、それを撮ったのがかなりあります。それも、そのまま教材にも使えるわけです。さらに今回私が担当したのは、2年生を中心にロケをしたんですけれども、他に4年生の授業というのも撮っておりますので、それもそのまま、また教育実習生の授業とか、あるいは、そういう形で利用できるんじゃないかというふうに思っております。

「教育実習の日々」では、教育実習の時間的な流れに従って構成してあります。校門をくぐってまず、最初に出席をしたというためのハンコを押すところから、撮り始めましてですね、それからオリエンテーションに続いて就番式があるわけなんです。続いて学級参観、いろいろな初授業も当然撮りましたし、あるいは、運動会のもよう、ベテラン先生の示範授業、いろんな教育実習生の研究会のもよう、慣れてきた授業をさらに撮りまして、おしまいの頃に研究授業を撮り、さらに一番最後には、お別れ会という非常に感動的なシーンをもって参りました。

この他に、実習生の授業シリーズでは小学校の算数編と国語編というのを1本ずつ作り、さらに少しベテランのある教師の授業と、これは小学校の算数の授業ですけれども、その3本を作ったわけです。

授業シリーズでは、実習生の授業をそのままなるべく手を加えないで、授業の間をずっと始めから終わりまで、教室にカメラを2台置きましてあらゆる角度からその模様を撮りました。ここでは、実習生の慣れてない最初の授業と、一番慣れてきたその最後の研究授業というのを撮っておりますので、実習生が一番最初にどんな授業をし、慣れてくるとどう変わってくるのかというような

ところ、さらに、ベテランの先生の授業と実習生の授業とはどう違うのかも、この教材で見えていただけるのではないかとこのように考えております。

この教材は、先程も申し上げましたように、なるべくありのままを正直に構成をしたという所が特徴で、教育実習とはどういうものでどうやったらいいのか、教育実習の中における授業のあり方、あるいは、その指導の先生方との付き合い方と言いますか、教わり方と言いますか、それはどうあったらいいのか、ベテランの先生の授業の仕方はどこに特徴があるのかというような所をですね、いろいろこの教材を見ていただければ、これからの教育実習に対する心構えというようなものも、実習生の方々には出来るんじゃないかという所を、私としては、一番期待しているわけであります。

四方 中、高編の場合、合計、1インチに直しますと約21本、全部60分、およそ20時間近くの映像資料が集まっていることになります。もちろん、NGの分も入っての話ですけども、そういうものが大変、貴重なものがたくさんあるということです。

中・高編の「教育実習の日々」の構成は、実習のおよその流れを見せるということです。今回の場合、中学校と高校の併設校だったもので、それがダブッて入ってるわけですが、そのために細切れみたいになった部分もあります。一応、登校、出勤簿の捺印から始まりまして、全校集会、履修の心得や指導、教師の授業参観、最初の授業、最後の授業、その他、教材の準備作業とか模擬授業と言った授業研究の場面も入っています。それから、一番最後に実習生がその実習についての反省を突然喋り出したのをあわてて、撮った場面があります。そこには『先生って、大変ねぇ。』っていう言葉が出てきたわけなんですけど、それは実感であったと思います。これが、大まかな流れです。

授業の録画では、実習生の最初の授業や最後の授業、おもに今回の場合は、高校は国語それから中学校は英語を、実習生を中心に追いかけていたので、その研究授業を含めて9本を録画しました。中には、使えないのもありますが一応9本の授業とそれらの反省会とかそういうものも含めて、資料として大きなものが残っています。その他には、実習生の日常のものも追っかけてとって

あります。

それから、見どころですが。まず中学校の英語の方は、これはワンカメと言いまして、1台のカメラで撮った記録なんです。それを編集なしにそのまま撮ったロールを継ぎ合わせてしたものですから、多少カメラがでていたりブームが入ったりしてますけれども、一番最初の授業ということで、大変興味があると思います。それから高校の国語の方は、カメラが2台使っておりますので比較的に見やすいようにできてます。中学生と比べて高校生は何分大変違います。はじめはシラッとしていましたが、だんだん実習生の情熱に引っ張られていて、授業にひっこんでいく、そういう所も見どころだと思います。

今回の場合まとめたのは、それぞれ1本ですけれども、これを最初の授業の場面と、最後の授業の場面とを比較してみると、実習生が、2週間なら2週間、20日間なら20日間の間に、成長していった過程がよくわかるんですね。そういう意味では、これを今後、こうした視点から編集して資料に使っていただくと、大変、意義深いものになると思います。私は、はっきり言ってそういう意味では、その変化のところを見ていくと、下手なドラマよりもおもしろかった。大変興味があったということを付け加えておきます。

それから、教育実習に行って、一番驚いたのは、まず、生徒がカメラに慣れないんで、少しあがり気味だったということです。それに比べて実習生の方もあがってはいたと思うんですが、態度から見れば、そう見えなかったようです。今回たまたま協力してくれた実習生は、大変堂々としてて声も大きく、特に女性の英語の実習生なんかは、大変、声も大きく教室を走り回るようにしてやってたんですね。そういうことでは、堂々と見えましたね。それから、国語の高校の方の男子の実習生ですが、高校というのは一般に授業に生徒がついてきてくれないのですが、彼は辛抱強くひっぱって行って、最後には自分のペースにのせるあたり、私自身が予想していた以上に大変優秀な実習生だったと思っています。二人とも、努力といいましょうか、情熱といいましょうか、そういうものは、大変良かったと思います。それから、生徒にしても、だんだん慣れていて、協力的だったと思います。そういう意味では、いろいろ条件がうまくい

った方だと思います。

試作品の評価と期待

坂元 制作の過程でのご苦心と特徴、さらにみどころについてご披露いただいたわけですが、特に、この「教育実習の日々」を事前指導でお使いになったときの、学生の反応はいかがだったでしょうか。

柴田 学生側の反応ですが、これは早速60年度の事前指導に東大でも使いましたし、他の大学でも試作品を使っていたかということが、この4月に実際に行われたわけです。

東大の場合について申しますと、4月の中頃に行われた事前指導の中で、このビデオを見せて、その直後に、学生にそのビデオを見た上での感想、意見を書いてもらうアンケート調査をやりました。それを見ますとまず、実習の全体像が大体良くつかめたということが、その反応としてかえってきています。その全体像をつかむことによって、一方ではかなり緊張を覚え、これから十分な心構えをもってやっていかなければいけない、という反応があります。もう一つは気が楽になったという反応です。ある程度どういことをするかが分かったので不安といいましょうか、いらぬ心配がなくなったという側面です。ということで、学生も全体としてビデオ教材に対して非常に好感をもって受入れて見たということが直後のアンケートにも出ていましたね。

それから、この実習が終わったあとの事後指導の際に、このビデオ教材が実際の実習に当たってどのように役立ったか、参考になったかを、もう一度学生に聞いてみました。学生側の意見は、やっぱりいろんな面で参考になったとしています。是非これからも事前指導の中でこのVTR教材は使うべきだ、絶対にあれが必要だということを回答してきています。

そこでどういう点が参考になったかということですが、まず全体像がつかめた、2週間の教育実習の中で何をするかということの大体が分るような筋立てで造られているということについて、評価しています。それから細かい点では、

指導教官がどういう指導をしてくれるかということがおおよそ分かり、その心構えが出来たというような評価があります。これは今度の教材の中で国語の指導教官が国語の授業をした実習生に対してかなり懇切丁寧な指導をしているためと思われます。大学教官側の評価も同じでしたが、実習生もどういう指導がなされるかが分ったということで、良く評価していますね。

それから、注文というかもっと良く改善していくとしたらどういう点があるかということも聞いたんです。今回の教材の場合、英語と国語の授業しか出ていないので、その他の教科の実習を行う学生達から、自分達の教科がどうなるかが知りたいと言う注文が、かなり多く出てきました。たとえば、理科の学生の場合、理科の実験をどうするかという不安があるわけです。

それからもう一つ多く出てきたのは、実習生の授業を受ける生徒側が、どういう反応を実習生の授業に対して示すかを、もう少しビデオ教材に載せられないかという希望があるわけです。

これは、今後の教材作りの中で、参考にしていかなければいけないことですが、今回の教材の場合、人為的にいろいろとこしらえた面がなくて、ごく自然な形で実習の全体の流れが出てきているということの評価する声が多かったですね。つまり、あまりうまくいってないような授業場合、いろいろ検討すれば欠陥がいろいろ出てくるような授業風景などもそのまま出ているということですね。そういう特にこしらえたものではなくて、ごく普通にありうる実習の状況がそのまま出ていたということから、授業実習がどういうものかということをも学生側としてもつかみやすくなったということが言えるんじゃないかならうかと思います。

それから今回のビデオ教材は東大の附属学校で、中学、高校編を作ったわけですが、その実習校側からの問題といえますか、それについて少し話します。この附属学校の場合は、教育実習が学校のひとつの使命になっている面もあって、実習生の受け入れ、そして今回のような一種の実習に関わる研究活動を進める上では、いろいろな条件がよく整っていたと思うんですね。先生側もこちらよくこれを引き受けてくれたし、生徒側もこういうビデオをとることについ

て、ある程度慣れてきているということがありました。

それから、たまたまこの校舎が昨年全面的に新しく作りかえられた新校舎であるということもあって、その空間的な余裕もある程度他の公立高校と比べると条件に恵まれ、撮りやすさがあったんじゃないかと思います。さらに、この東大附属の場合は、特別優秀な生徒を集めたということではなくて大体平均的な生徒を集めた学校であるという事が言えるんです。そういうことで見ればこの2週間の教育実習の流れというものは、まず一般的にどこの実習校に行った場合でも見られるような状況を見ることが出来るということが言えるんじゃないかと思います。

井上（東京学芸大学助教授） この録画収録にご協力いただきました附属大泉小学校は、教育実習の改善に非常に積極的に取り組まれてきた学校です。また、教育情報管理システムを設けるなど、AV関係の研究のパイオニアでもあります。その意味で、先生方はもちろん、子どもの皆さんも、この仕事に積極的にご協力いただき、大変恵まれた条件の中で、進められたと思っています。

ところで、この教材（「教育実習の日々」）についての評価ですが、まず、教育系大学の先生方から出てきたものとしては、全体的に非常に期待が大きかったということです。ただその注文は、ある場面をもっと掘り下げてほしいという意見があるかと思えば、もっとこんな場面も入れてほしいと広がり的一面もあります。さらに、附属校よりも公立学校でのもっと一般的なものにしてほしいという意見もあれば、個性的なものを数本、他にも作ってほしいという意見もあります。

もちろん、こうした意見を限られた番組で満たすことはできません。むしろ、こうした要望を今後の計画にどう生かし、全体の教材のネットワークを作っていくかが重要だと思います。そういった全体の教材の「オリエンテーション」もしくは「イントロダクション」の部分にあたるのが、このVTRテープだと受けとめていただけたらと思います。そういうことで先生方の要望に全部答えることは、できないんですけれども、いくつかの改善を先生方の指摘をうけてやって参りました。

一つには、小学校編では、初めに作ったものは、あれもこれもということでいろんな場合を入れたんですけれども、教育実習という限られた期間の中で重要と思われる部分を多くし、他のものをカットしたというようなこともございます。二番目はですね、使用性あるいは素材としての意味をリアルに出しているという点です。使うのは私達が使うのではなくて、やはり大学の先生が、どうにでも料理できるように、そして又、部分的に利用してもいいし、全部を利用していいし、必要な所を細切れに、ぶった切りにして使ってもよいというようなことを考えて、できるだけ素材性を高める工夫をしました。印刷教材をなるべくたくさんにしたのもその理由からです。シナリオのプロトコールというものも入れて、これは、使っても使わなくてもいいんですけれども、重要な場面だけを、印刷して学生に渡すというようなこともできるんじゃないかということですよ。

児島 これを視聴した学生の反応をみますと、先ほど柴田先生のご指摘と同じものが、小学校編でもいえます。実習の見通しができ、不安が取除かれたという安心感をもつ反面、新たな緊張感、切迫感を感じるようです。ただ、その緊張感も、教育の難しさを感じ、あえて挑戦していくという積極的な側面からで、このことを「心構え」といっていいんじゃないかと思います。

ただ、先ほどのお話しになかったいくつかの興味深い反応もうかがわれます。その一つは、大学の先生方の評価に比較して、もっと番組を長くし、いろいろの場면을あれこれ盛りこんでほしいという要望が学生に強いことです。予想できない場面にどう対応できるかに、不安を持っているためだと思われます。

第二は、「児童理解」の側面に、もっと知りたいという要望が強く現われていることです。子どもが何を考えどう行動するのか、この子どもにどのように接していったらよいかという側面です。中・高校生に比べて子どもが小さいだけに、この要望が小学校では強く現れたのではないかと思います。その点で、実習生と子どもとのインフォーマルなふれあいの場면을どう盛りこんでいくかが、次の課題だと思います。

第三は、授業場面が中心になっていますが、授業を創っていく「準備」の過

程、さらには指導案の作成過程をもっと丁寧に見せてほしいという要望が強く出ています。「授業の設計」に学生の注目が集まっているようです。こうした要求にどう応えていくかも、次の課題だと思います。

実習生に何を学ばせるか

坂元 先生方の反応や学生の反応等についてお聞かせいただいたわけですが、これらのビデオ・テープを使っていく場合、どんな配慮が必要でしょうか。すでに、そのいくつかはこれまでのお話にも出ていますし、さらに課題も出ていますが、そのことも含めまして、いろいろとお気づきの事柄をお話しただけならと存じます。

井上 すでにお話しに出てきましたように、多くの場合、番組というのは、演技をしたり、何かをしたりしてしまうわけですが、ここで作られたテープは事実というものを基にして作られています。ですから、それを対象化していくということが非常に重要じゃないかと思っております。教育実習生がそういう意味で授業の概略や教育実習の概略をつかむには、非常にいい番組ではないかというふうに考えております。

つまり、教育実習生が一番心配するのは、授業ができるかどうかということです。授業がどのように構成され、教師としてどういう行動をとらなければいけないのか、あるいは、子供にある働きかけをした場合に、子供はどのような反応をするだろうか、その反応したことに対してどういう対応策を次にたてなければいけないか、そういったことを授業の画面から学ぶことができるんじゃないかと思えます。それによって、授業についてのイメージっていうものが湧いてくるんじゃないかと、ここが非常に重要なことじゃないかと思っております。

柴田 前に言いましたけれども、授業研究の立場から見ていけば、この実習生の授業にはいろいろ欠陥と言いますか、いろいろ問題点を含んでいます。ですから、このビデオ教材を見ながらこれから実習に行く学生自身も自分ならもっとこういうことが出来るんじゃないかと、こうした方がいいんじゃないかと

か、いろんな考えや意見を持つことが出来るわけです。これを使われる大学の先生側で、これを基にして学生側にそういう意見を出させて、そのディスカッションをさせることも出来るわけです。つまり、授業についてのいろんなディスカッションを通して、ひとつの授業研究の素材にすることもできるんじゃないかと思うんですね。

児島 授業というのは、よく一過性というふうに言われておりますけれども、なかなかそのモデルになるような場面にぶつかる機会が少ないわけですね。ですから、1週間実習中に観測しても、何回かしか、この典型的な場面に接することができないわけです。また仮にそういう場面に直面したとしても、気付かないという場合があるわけなんですね。それから実習に行きますと、先生も忙しいですから、それ程、指導してもらえないなんてこともあります。

そういう意味で、授業を基本的に見る目、失敗したときこうしたらうまく行くといった典型的な場面をいくつか見て、それから実習に行くと実際に授業を観察したりする時にですね、「ああ、これは、こういう場面なんだ」ということが直感的にわかってくるんじゃないかというふうに考えております。やはりですね、先程も言いましたように、過ぎ去ってしまう授業というものを繰り返し見ることによって、そこにひそんでいる先生の行動の意味、子供の発言の意味、それからクラス全体の様子っていうのがイメージ化されてくるんじゃないかと思っております。

といっても、なかなか学生には、授業が見えないわけです。そのこともあって、このビデオ教材には色々な授業のプロトコールだとか学校の紹介だとか指導案だとかつけてありますので、そういう素材を基にして授業を見ながら授業の構造を解明し、授業の見方、あるいは、分析の仕方、あるいは、見る視点、あるいは、見る目を養っていくということが出来るんじゃないかと思っています。

井上 これらのビデオ教材に即して具体的にいいますと、例えば、授業の「教育実習の日々」の小学校編ですけれども、先生が介入していく場面がでてきます。実習生の発言の中にあいまいな所があったため、子供達が混乱してしまっ

たという場面があります。そういう根拠があって指導の先生が介入しているわけですから、その場面から何故介入したかという理由を読みとらなければいけないということがあります。

それから、机間巡視をしていますけれども、うしろで実習生の仲間が見てたり、指導の先生が見てたりするので、あがってるということもあるんですけれども、うしろまでいかないでだいたい前から3列か4列位の所までスーッと行って、まあすぐ教壇の所に戻ってまた別の列の所に行くようなことをやっています。この場合、子どもに何かの作業をやらせたり、考えさせたり、あるいは、考えたことをノートにまとめさせたりしてるわけですから、子供達の学習状態をまず把握し、その中から代表的な考え方を見つけて、次に誰にあてようかというようなことを探すのが、机間巡視の意義です。そうしますと、前の列をちょこちょこ回っただけじゃ、やはり、不十分なんです。意識的に全体をまわってみて誰がどういう考えをしているのか、あるいは違った作業をやっている場合には、修正していかなければならないわけです。

どんな場面で活用できるか

坂元 私も、いろいろと目につきました。今、井上先生がおっしゃったように、例えば実習生が机間巡視をしていて、前の方だけを巡視しているけれども、どうしても後ろの方には、足が向いていかないとか、子供のノートを調べる時に高い位置から見ている、普通の先生のように子供の目の高さまで姿勢を低くして、子供のノートをのぞき込みながら指導するといった態度はまだ欠けているとかですね。それから、国語の授業のうしろに前の時間の算数の数式が、まだ残っているという場面もありました。いろいろ御利用になる先生方が御覧いただくと、実習生の授業に対して注意しなくてはならない点が山ほど入っていることに、気付かれることと思います。

ところで、これらのビデオ教材を大学教育のどのような場面で使ったら効果的だとお考えでしょうか。たとえば、大学の中では授業分析、授業の研究に使

うこともできるでしょうし、大学の教育だけでなく現場の先生方の現職教育といえますか、校内での実習生を研究する場合の研究だとか、それから、あるいは自分自身の授業を改善して下さる時の研究等にも役立てていただけるものではないかというふうに思うわけです。このようなビデオ教材というのは、特に大学の場合、現場に行ってもその場で教育する事が出来ない、にもかかわらずその場の教育について教育しなければならないという場合に、大いに役立つと思います。それから授業研究のためには、時間提示が画面の中に入っておりますので、大変に助けになることかと思えます。

柴田 これをどのようにして大学側で使うかという問題ですが、「教育実習の日々」の方は、実習に出る前に実習の全体像をつかむために作られたもので、事前指導の中で使うことが当然行われるであろうと思うんです。ただその場合学生が自分ででもいつでも見られるようにして、その流れをつかむというやり方もできるし、一斉にこれを見せて大学の先生方が解説を加えるというやり方もあるわけです。

それから、授業編の場合は、事前指導の中で使うということも勿論ありますが、その他に教科教育法の講義の中で、ひとつの例としてこれを素材にいろいろ検討するということができると思います。さらに教科教育法以外にも、教育方法や授業研究といった大学で行われている教職課程のいろんな科目の中でも、おそらく有効な素材になると思います。

児島 利用の場面としては、一つには事前指導とかオリエンテーションの場面があります。オリエンテーションといっても大学によってかなり違いがあります。多くは一回限りの1日だけとなっているようですが、その場面は、特に「教育実習の日々」は役に立つと思います。しかし、中には15回位のオリエンテーションをやっている大学もあります。これらの大学では「授業編」も役立てていただけるものと思います。

それから、教育実習後の事後指導にも活用できると思います。実習経験がないと、とかくベテランの教師の授業は複雑・高度でわからない部分があります。モデルとしてハイレベルなわけです。その意味で、実習前の指導では、実習生の授業がモデルとして適当かと思われそうですが、実習後では、むしろ、こうした

ベテラン教師の授業を見せることにより、ベテラン教師の授業と実習生の授業とを比較分析させることにより、実習経験をもっと深めることが可能になるかと思ひます。またここでは、授業の評価・分析の手法を学ぶことに焦点をおいた指導の素材として活用できるのではないかと思ひます。

井上 教職課程全体の中でのこれらのビデオ教材の位置づけとしては、次のようなことが考えられます。まず、「教育実習の日々」は、オリエンテーション向けに作ったものですから、それをそのまま教科教育とか教育方法の中に持ち込む事は出来ないんじゃないかと思うんです。けれども、実習生の授業とかあるいは現職教師の授業というのは、使えるんじゃないかと思ひます。

それは、印刷教材として指導案、授業の概略、プロトコール、それから学校紹介というものがついておりますから、指導案の作り方、その指導案に基づいて授業をやったらこういうふうになったというような事実を基に教科教育等でその先生なりにアレンジしていただければ、非常に大きな使い方が見い出せるんじゃないかと思ひます。

それから、自分の実習したある学校のある学年のあるクラスというのはやはり、それを一般化していかなければならない。自分の経験を一般化していかなければならない。そうすると、何かつき合わせる材料というのがどうしても必要になってくるわけです。また、それによって自分の経験の幅を広めていくということにも役立っていくんじゃないかと思っております。

坂元 この教材が幅広く教師教育に使われることを希望するとともに、こうした有益な企画をたてて実行して下さった放送教育開発センターの関係各位に御礼を申し上げたいと思ひます。

今後の作成の計画ですけれども、「教育実習の日々」だとか、実習生の授業を小学校、中学校、高等学校とどんどん増やしていくつもりです。「教育実習の日々」に関しては、公立の小学校、中学校、高等学校でのビデオ教材を付け加える予定です。また「授業編」につきましても、いろいろ教科を増やすとともに、実験や作業場面等も取り扱おうと考えております。さらに授業の方法、授業の設計の仕方、マイコンの教育利用等、いろいろ多数の計画がなされておりますので、どうぞ期待して、お待ちいただければと思ひます。

どうも今日は、ありがとうございました。

(昭和60年11月18日)